書　評・紹　介

河野稠果・大淵寛編
『人口と文明のゆくえ』（シリーズ・人口学研究12）

大明堂，2002年11月，viii+288pp

文明と人口変動の相互作用を論じた本書は，人口学研究会が共同研究の成果を公刊しているシリーズの最新巻である．文明論ではあるが，あくまでも人口の視点から文明のゆくえを展望している点がユニークであり，人口研究に新しい領域を拓く試みとして高く評価したい．

各章の題名をみるとわかるように気宇壮大な構想であり，各分野の専門家が分担執筆して，次のような構成になっている．第１章　人口の波・文明の波（大淵寛），第２章　経済社会システムの転換と人口変動（鬼頭宏），第３章　飢餓・疾病・災害と文明の対応（西川由比子），第４章　人口移動・都市化と文明の盛衰（森岡仁），第５章　家族変動とそのゆくえ（阿藤誠），第６章　現代文明と女性のエンパワーメント（佐藤龍三郎），第７章　少子・高齢化の文明史的意義（嵯峨座晴夫），第８章　文明の衝突の人口学的考察（岡崎陽一），第９章　人口変動と地球環境の変化（加藤久和），第10章　成長の限界と世界人口の将来（井上俊一），第11章　人類と文明のゆくえ（河野稠果）．

まず第１章で，文明とは「人類が獲得してきたすべての知識，制度，慣習，技術などを含めた価値の総体」（p.4）であると，広く定義している．第２章は「文明の人口支持力」という視点からする文明と人口の歴史分析であり，第３章では過去における飢饉や疫病，文明がつくりだした災害などを論じている．第４章では人口移動・都市化と文明の盛衰との関係をとりあげて，「人類は人口増加を通じて文明を生み，文明を通じて人口増加を実現してきた」が，「人口増加なき文明進化の時代」（p.93）がやってくるという．新しい時代に都市がどのような役割を果たすのか，興味深い問題である．

第５章は家族変動を論じた章である．新しい家族観（情緒的核家族化）が広まり，家族の多様化が進んでいる．単身赴任の家族関係，パラサイト・シングル，家族をもたない高齢者の増加など，家族形態と家族の人間関係を論じて，切れ味のよい分析である．第６章では，現代文明と女性のエンパワーメントを論じ，男性優位文明からの脱却へと，社会は進化しているという．少子高齢化社会を論じた第７章では，なぜ近代化が低出生をひきおこしたかを検討して，究極的には「豊かさ」と「個人主義」がその原因であると結論している．

第８章では，文明グループ別の人口問題の解説をおこなっている．第９章は，環境と人口を論じるうちに文明のゆくえが環境問題に深く関係しているという結論に到達している．地球的な規模の問題に対処するためには国際的な協調が必要である．第10章では，世界人口の将来予測を紹介している．将来人口は地球の人口扶養力に依存するものであるが，歴史的な文化の総体すなわち文明と切り離して論じることは出来ないという見解は卓見である．

多くの章で，文明の発達が資源の大量消費と人口増加を結果し，成長の限界が目前に迫っていることを指摘しているが，最終章では，「文明が発達した段階で生殖活動，家族形成活動に齟齬が生じ，出生率が置き換え水準以下に低下して人口が減少する現象，そして人口の衰退が文明を衰退させる可能性の当否」（p.252）を論じている点が特徴的である．「子どもは可愛いく美しい」と考えるか「子どもを持つことは格好が悪い」と考えるかが重要な問題であり，マス・メデイアの役割が大きいという．なるほど，文明のゆくえを左右する要因は多様である．

編集方針に関して，若干気になる点がある．⑴文明の定義が各章に出てくる．かなりの章の第１節にそれぞれ文明の定義に関する叙述がある．これらの定義にはどのような違いがあるのか．違いがないのなら重複である．⑵宗教も広義の文明の一側面であり，人口問題の認識と人口政策思想の形成に，宗教は深くかかわってきた．人工妊娠中絶や安楽死に関するさまざまな宗教団体の考え方とその変化なども検討に値しよう．人口と文明のゆくえを論じるにあたって，重要な研究課題であろう．

（兼清弘之／明治大学）